

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 邱 函妮

第一・二章は、主として言説の分析によって、台湾美術における「地方色」の問題を日本の近代美術ともからめて考察している。非西洋地域が西洋近代の美術を受容することは、必然的に受容する側の地方性（それは同時に独自性でもある）という問題を浮かび上がらせるのだが、台湾が日本の領土の一部とされていた時代には、その問題は台湾の作家にはさらに複雑な意識、植民地的近代を生きるディレンマをもたらした。東京に留学して美術を学んだ者が、自身のアイデンティティーとつながる故郷である台湾をそこで発見する、ということも起こる。この2章では、一次史料を中心とした文献を精査して、作家・批評家の多様な考え方に触れ、それらの言葉を効果的に援用しながら、台湾の美術展覧会に求められたものと表わされたものとを、ふたつながらよく浮き彫りにしている。

具体的な作品について考察する第三章以下のうち、特に第三章第三節の郭雪湖「南街股賑」に関して、近代的な都市の姿と台湾の地方的なものとがともに表されていることを説く考察は、創意に富むものといえよう。画家は建築の外観を変え、位置を移動し、存在しなかった広告看板を多数配置して、現実の市街を改変した。——そのありさまが詳細に分析され、異国風であり、現代的であり、土俗的でもある台湾のイメージが画面にいかにか合成されているか、的確に明らかにされている。同じく第四節の陳植棋「真人廟」について、それを台湾民族主義運動と関連づける見解も興味深い。第四章では陳澄波の描いた一連の都市景観を一種の自画像として、作家のアイデンティティーとの関係で論じる。「嘉義公園」は、一見して実際の景観とは異なる異様な相貌に表されており、その表現に中国や日本の古画・新画からの引用や干渉を見ようとする着眼はよい。

第五章は、陳澄波と陳植棋の自画像や表現主義的な作風を取り上げ、さらに浮世絵の影響も推測する。彼らの芸術家意識にせよ浮世絵との関係にせよ、いずれも本格的に論じられたことのない主題であろうから意義はある。ただし、現状はここまでの考察に較べればやや軽く、付論と見えかねないので、論文全体の構成も含めて再考の余地がある。

台湾の作家が留学時に日本で遭遇した制度には注意が払われておらず、また、作品について政治的な意味を読み取る解釈には傍証が不足している印象を与える。中国や日本の絵画から何を受容したかという点に関して適切な同定とはいえない例もあり、伝統的な技法の絵画などほかに論ずべき対象も残される、などの問題点はある。しかし、全体として、当論文は大きな問題に取り組んで多角的な考察を加えており、数々の新発見に到達した成果と認めることができる。審査委員会は、今後の課題を指摘した上で、博士（文学）の学位を授与するのを適当と判断した。